令和５年度

広島平和記念式典参加体験文集

安　曇　野　市

令和５年度　広島平和記念式典参加事業

１　目　的　広島平和記念式典に参加し、過去に起きた戦争の悲惨さを実際に見る機会を通じ、平和について学び、考え、行動するなど、平和に対する意識の高揚を図ることを目的とします。

２　日　程　令和５年８月５日（土）　原爆ドーム、広島平和記念資料館　見学
被爆体験記朗読会　聴講
令和５年８月６日（日）　平和記念式典　参加
ひろしま子ども平和の集い　参加

３　参加者　市内中学校７校の生徒代表 14 人、松本大学「平和創造研究会」３人
及び安曇野市校長会代表以下引率４人

４　資　料　平和記念式典 こども代表による「平和への誓い」

みなさんにとって「平和」とは何ですか。
争いや戦争がないこと。
差別をせず、違いを認め合うこと。
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。
身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和 20 年（1945 年）８月６日　午前８時 15 分。
耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。
子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。
たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」
仲間を失った私の曽祖父は、そう言って自分を責めました。
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから 78 年が経ちました。
今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。
「生き残ってくれてありがとう。」
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。

私たちにもできることがあります。
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。
友だちのよいところを見つけること。
みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

令和５年（2023 年）８月６日
こども代表
広島市立牛田小学校　６年
勝岡　英玲奈
広島市立五日市東小学校　６年
米廣　朋留

目　次

				ページ
繰り返さない８月６日	豊科南中学校	３年	中越　滉貴	1
平和の実現に向けて	豊科南中学校	３年	中野　和菜	2
「平和のために」	豊科北中学校	３年	伊藤　大雅	3
澄み渡った空から	豊科北中学校	３年	小林　瑞季	4
平和の形	穂高東中学校	３年	塚山　聖	5
今、私に出来ること	穂高東中学校	３年	徳竹　芽依	6
広島から学んだこと	穂高西中学校	３年	荒井　悠ノ介	7
「未来へ」	穂高西中学校	３年	佐藤　ふわり	8
平和を守るためにすべきこと	三郷中学校	３年	荒深　来実	9
これからの平和のために	三郷中学校	３年	松村　叶和	10
平和式典に参加して感じたこと	堀金中学校	３年	百瀬　唯希	11
未来永劫変えないために	堀金中学校	３年	丸山　幸	12
繋(つな)いでいくもの	明科中学校	３年	三河　唯人	13
伝え続けることの大切さ	明科中学校	３年	鳥羽　可苗	14
松本大学　平和創造研究会の皆様より			神戸　美乃里 藤田　達也 長谷川　早紀	15
－おわりに－				
令和５年度　広島平和記念式典参加事業を振り返って		校長会引率責任者	臼井　宏之	16
広島平和記念式典参加事業のあゆみ				17
事業の記録				18
安曇野市平和都市宣言				21

繰り返さない８月６日

豊科南中学校　３年　中越　滉貴

一日目、私が見たものは、ニュースで取り上げられているロシアのウクライナ侵攻での戦争のイメージとは大きくかけ離れていました。原爆が落とされた広島へ行き、最初に見た原爆ドームでは原爆のとてつもない破壊力に衝撃を受けました。また、平和記念資料館には、破けてぼろぼろになった服や高熱火災によって溶けた仏像、全身に火傷を負った男性の写真など残酷な資料が沢山ありました。その中でも人の皮が熱で焼けただれ、水を求める人々により川が死体で埋め尽くされている絵を見て言葉を失いました。この絵を見なければ、未来の自分は何も考えずに笑って過ごしていたかもしれません。しかし 78 年前に実際に落とされた原爆により多くの命が失われた現実を私は一生忘れません。

「げんしばくだんがおちると　ひるがよるになって　人はおばけになる」

この詩は、被爆体験記朗読会で読まれた詩です。詩の中にある「人はおばけになる」という表現は、体が熱すぎて腕を体に付けることができなかった様子を表しています。原爆の恐ろしさがリアルに伝わる詩で強く印象に残りました。

二日目の平和記念式典では、こども代表の平和への誓いを聞いて改めて平和について考えさせられました。自分の生活に置き換えたとき、今の自分はどれだけ楽をして幸せに過ごしているのか。そんなことは今まで考えたことがありませんでした。広島で起きた原爆の悲劇を世界中の人に知ってもらいたい。

そしてロシアによるウクライナ侵攻が今もなお続いています。広島に原爆が落とされた日のように、未来ある子どもや多くの人々の尊い命が奪われています。核兵器を無くすことは簡単ではありません。しかし、今回学んだ原爆の恐ろしさを周りの人に伝えることはできます。より多くの人が広島で起こった原爆について知ることができます。もし今後、戦争で原爆が使われることがあれば、それは世界の終わりだと思います。

ウクライナの人々は常に死と隣り合わせの環境に置かれています。恐怖に怯え、寝ることも、まともに食事することもできていません。広島の悲劇を二度と繰り返すことのない平和な世界が訪れることを願います。大切な家族の遺品を寄贈してくださった方たちの思いを受け止めて、私たちが言葉にしていかなければならないと思いました。この経験を通して、当たり前という平和の形を世界中の誰もが築いていくべきだと感じました。二日間で学んだこと、考えたこと、感じたことを後世に語り継いでいき、同じ過ちを繰り返さないことが平和への第一歩です。全国の学校の修学旅行では広島に行くべきだと思いました。また、ロシアは、今すぐウクライナへの侵攻を止めるべきです。

平和の実現に向けて

豊科南中学校　３年　中野　和菜

私は８月５日、６日に広島へ行き、広島平和記念式典に参加しました。今回、たくさん学んだことの中から特に印象に残っていることを二つ紹介します。

一つ目は、広島平和記念式典に参加して感じたことです。広島に原爆が落とされて 78 年が経(た)ちました。原爆投下から長い年月が経(た)った現在も、後遺症により苦しんでいる人や亡くなってしまった人が多くいることを知り、衝撃を受けました。原爆犠牲者の方々は水を求めながら亡くなったため、慰霊碑の周りは水で囲まれており、式典では広島市内 17 か所から採水し慰霊碑に供えられます。

二つ目は、式典後に行われた「ひろしま子ども平和の集い」についてです。この集いでは、広島市内の中学校などの平和への取り組みや、被爆者である梶本さんのお話を聴きました。広島市内のある中学校では、平和への取り組みとして行っている「いじめ撲滅運動」について発表してくれました。この発表を聴いて、自分の学校でも平和への取り組みで何か取り入れたいと思いました。被爆者の方のお話では、当時の中学生と現代の中学生の環境の違いに驚きました。私たち現代の中学生は当たり前のように学校へ行き、当たり前のように勉強していると思います。しかし、当時の中学生は、建物疎開といって、学校へ行けず建物を壊す日々を過ごしていました。私はこの話を聴いて、自由に楽しい学校生活を送ることができなかったと知り、とても心が痛みました。

このように、この二日間は私にとって貴重な経験ができた二日間でした。世界では、ロシアによるウクライナ侵攻や紛争などが起きています。平和を実現させるためには一人一人の意識改革が必要で、それが平和への第一歩だと私は考えます。被爆者の思いを残すためには、私たち若い世代が記録として受け継ぐことが大切だと、この二日間を通して感じました。そして、今回学んだことをそのままにせず、家族や友達などいろいろな人に伝え、少しでも関心を持ってもらえるように自分から発信していきたいです。

「平和のために」

豊科北中学校　３年　伊藤　大雅

僕は、８月５日と６日に広島へ行き、様々なことを感じ、学んできました。特に、広島平和記念資料館には、心を締めつけるものがたくさんあり、もう二度とこの惨劇を引き起こしてはいけないと強く思いました。

資料館には、火傷と負傷にあえぐ被爆者の写真や、放射線により頭髪が抜けたり体に斑点ができたりした人の写真や、被爆してボロボロになった服や三輪車などが展示してあり、僕は、原爆の被害がこんなにも凄まじいものだったのかと認識を改めさせられました。特に心に残ったのは、被爆してすぐに死に切れずに苦しむ人々の様子です。被爆後すぐに亡くなってしまった人々はもちろんですが、すぐに死ぬことができず、様々な症状に耐え続けなければいけなかった人々のことを想像すると、さらに心が締めつけられました。被爆すると、爆発による熱線や爆風だけでなく、放射線による被害も受け、火傷や物が当たったことなどによる負傷や、吐き気、食欲不振、下痢、頭痛、不眠、脱毛、倦怠感、吐血、皮膚の出血斑点など、ものすごく多くの症状が出ることを知りました。また、水が汚れたり建物が壊れたりもして、十分な治療を受けることもできないという状況になり、こんなにも多くの症状に耐えながら生きていかなければいけないというのは、拷問のように想像を絶する苦しみだと思います。さらに、原爆は予告されずに落とされたので、多くの人は覚悟をしていない中、突如としてこのような状況になってしまったと思うので、苦しみ、悲しみ、絶望して、まさに地獄のようだったでしょう。

地獄をつくりだした過ちは、絶対にもう二度と犯してはいけません。しかし、最近でもロシアとウクライナが戦争をしたり、北朝鮮がミサイル実験をしたり、多くの国が核爆弾を保有していたりして、いつ、また地獄ができてもおかしくない状況です。

そこで僕は、どうすれば完全に平和な世の中にすることができるのか考えました。僕は今まで原爆についてたくさんのことを耳にしてきましたが、今回資料館を見学したところ、今までよりも、強く心に響き、平和のために自分も何かやらなければという気持ちになったので、言葉だけで伝えるのと、様々な資料を用いて伝えるのとでは大きな差があると思いました。

僕は小学生の頃、総合の授業で、クラスで取り組んできたことを安曇野市民の前で発表する機会がありました。また、英語の授業の一環で、オーストラリアの小学生たちとテレビ通話で話したこともあります。このような機会が、多くの人々を平和のために動き出そうという気持ちにさせると思いますし、伝えられた人々が、こうした活動をして広めてくれれば、いずれ世界中が平和を目指すようになると思います。

世界中に平和の大切さを伝えるとなると時間もかかり、大変だと思いますが、今回感じたことを忘れずに、身近なところから少しずつでも伝えていき、発表や対話の機会を得ることを目標に活動していこうと思います。

澄み渡った空から

豊科北中学校　３年　小林　瑞季

私は友達と戦争の話をしたことがありませんでした。今でも授業などでたくさん学んでも、友達と深く話したり、考えたことはありませんでした。戦争の事を考えると心が締めつけられるので、話すのを避けていたのかもしれません。ですが私は、戦争を経験していないからこそ、同じ学年の人と戦争から起こった悲劇を一緒に深く考え、共有していきたいと思い、令和５年度安曇野市広島平和記念式典参加事業に参加しました。

広島は、すごく空が青く、きれいな町でした。ですが、78 年前、この澄み渡った空や、大切な命がたくさん奪われてしまいました。たった一発の原子爆弾でたくさんの人が今でも苦しんでいます。78 年たった今でも忘れてはいけない歴史を、いろいろな形で知りました。

広島平和記念資料館の入り口に一人の女の子の写真がありました。遠くから見た時に、女の子は少し笑っているように見えました。ですが、近づいていくと、女の子は笑っているのではなく、ゆがんでいるようなすごく不安で悲しい顔をしている写真でした。家に帰って来た今でも、鮮明に思い出すことができます。女の子はあの後どうなってしまったのか、その時にどのような思いで写真を撮られたのだろうか、と１枚の写真からたくさん考えさせられました。広島平和記念資料館には、被爆した方たちの家族の思いや、身につけていた衣類などの多くの展示がありました。それらの展示は、原子爆弾がどれほど恐ろしいかが一目で分かる物ばかりでした。広島平和記念資料館へ資料を提供された家族は、心に深い傷を負い、寂しい思いにある中で、資料館に提供してくださったと思うと、胸が張り裂けてしまいそうでした。もう二度とこのような恐ろしい原子爆弾を使用してはいけないと思いました。

Ｇ７サミットの広島開催は、被爆地である広島に注目を集める契機となり、たくさんの外国人が来館しています。来館者の 40%が外国人です。この辛い歴史を世界中の人に考えていただき、足を運んでいただいたと思うと嬉しく思いました。

黙とうの１分間で、私は 78 年前の８月６日の８時 15 分を頭の中に浮かべました。前日の原爆ドーム、広島平和記念資料館や被爆体験記朗読会で学んだ事から 78 年前の広島の町を想像していました。

被爆体験者の方のお話を聞いた後、私はこの辛い歴史を未来へ受け継いでいかなければいけないと心から思いました。被爆体験者の高齢化が進んでいます。その方たちの中には戦争や辛かった生活を思い出したくないと戦争の話をしない人もいますが、このような機会にお話しいただいたことに感謝し、私も原子爆弾の怖さを発信していきたいと思います。

私は今回広島へ行き、たくさんの友達や大人の方と戦争、原子爆弾について話し、学ぶことができました。今後は戦争や核兵器について友達と日常的に話をしていきたいです。

この世界から核兵器がなくなり、平和の灯（ともしび）[1]が消えることを願っています。

---

[1] 平和の灯（ともしび）：平和記念公園にある火台及び火。昭和 39 年の点火以来燃え続けており「核兵器が地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう」という願いが込められている。

平和の形

穂高東中学校　３年　塚山　聖

これまで本などで学んできた、原子爆弾のこと。それから戦争のこと。どれも現実味がなく、たとえ現に起こっている戦争のことでも、あまり深刻なことだと思っていなかった。しかしそんな思いがガラリと変わる。広島はそんな街だった。

多くの人は「戦争は良くない」と言います。なぜ戦争が良くないのかは、広島に行けば感情的に分かります。しかし、平和のことは直感ではあまり分かりません。戦争の悲惨な過去を切り抜き、それを今の僕たちの日常に当てはめ比べることで、平和の尊さは実感できますが、一体被爆者の方々が求める平和がどんなものなのか感じる事まではできません。どんな平和を被爆者の方々は求めるのでしょうか。

広島での体験の中で、原爆により起こった事を伝えていくのが、私たちにできることだと聞きました。アメリカを批判して、その批判を広めるのではなく、こんな事が二度と起こらないようにと、後世へ伝えることにしたのです。このことが、被爆者が求める平和を知る基（もと）になるでしょう。アメリカを批判することは簡単ですが、日本だけが被害を受けたわけではありません。日本側の責任を捨てて、アメリカを批判することは、アメリカの方を尊重しない自分勝手な行動でしょう。そのような行動は対立を生まない世界にはつながりません。

また、広島平和記念式典で、核兵器は、世界のどこにもあってはいけないと聞きました。これは、原爆などの脅威となるものがない世界が、理想の平和ということです。広島の方々や被爆者の方の根底には、「原爆がもたらすことは、理屈などではなく、明らかにおかしい」という、理屈より強い感情があります。その感情は、実際に原爆がもたらした被害などを知り、見て、聞いて、体験することで初めて生まれ、それを共有させていくことで、感情的な訴えのもと、平和を訴えているのでしょう。

これらから、脅威も対立もなく、感情的な行動と理屈的な行動のバランスの保たれた世界が、平和だと思いました。感情的な行動と理屈的な行動とは、感情的に考えれば人を殺すことはダメです。しかし、そこに理屈が入れば、その理屈の中で人を殺すことは正しくなります。この都合の良い理屈に頼り切った世界は、ファシズムや、全体主義に通ずる所があります。また、脅威がなければ何も起こらないのは当然です。

しかし、これらは理想、机上の空論のようなもので現実的ではありません。全体がその流れに乗った以上、別の平和を形づくらなければなりません。その中には、理屈で言いくるめられ、悲しい思いをする人が出るでしょう。

僕は、原爆の事を感情的に伝えたいと思います。しかし、そのことは心の中に留めていつまでも忘れないまま、現実の平和を考える時、思い出します。

今、私に出来ること

穂高東中学校　３年　徳竹　芽依

そこだけ今も時が止まっているようだった。壁は剥がれ落ち、むき出しになった鉄筋、今にも崩れてしまいそうなのに崩れ落ちることなく建っている原爆ドーム。写真やテレビを通しての映像ではなく、自分の目でその姿を目の当たりにした私は衝撃を受けた。

78 年前のあの日、たった一発の爆弾で、現在でも正確な犠牲者の人数が把握できないほど多くの人の命が奪われてしまうと誰が考えたのだろうか。奪われたのは命だけではない。大切な人と笑いあう時間、築き上げた財産、未来を思い描くこと、挙げるときりがない位の人間の尊厳が奪われてしまった。その惨状が私の目にはっきりと見えてくるような痛々しい姿であった。

今書いている原稿用紙を渡された時の私は、戦争があったこと、原子爆弾が広島と長崎に投下されたことを知識としては知っていたがどこか他人事と捉えており、遠い昔のおとぎ話のように感じてしまっていた。

だが、実際に広島平和記念式典に参加し、平和記念資料館に足を運ぶと、その衝撃が、悲しみが、やるせなさが他人事ではなく私の心を揺さぶった。当時のまま残っている遺品、被爆者が描いた絵、原爆投下後の広島の写真。それらは声を発することはないにも関わらず、戦争の悲惨さをこれでもかと訴えていた。目を閉じ、耳をふさいでしまいたくなるが、これは現実に起こったことだ。

戦争の悲惨さ、原子爆弾の恐ろしさを身に染みて感じるほど、今の平和がどれだけ重みがあるものか気づかされた。平和は水や空気のように当たり前にあるものではない。どれだけ平和を望んでいても、今この時間、たった一発の原子爆弾によって全て壊れてしまうかもしれない。

世界を見れば今でも戦争は終わっていない。地球上には約 13,000 発もの原子爆弾が存在している。原子爆弾を使うかもしれないと発言している国もある。もしかすると広島や長崎に投下された以上の事態になるかもしれない。それが十分起こりうるだけの原子爆弾や化学兵器が今も存在している。

そんな中、私たちに出来ることは何だろう。まずは「事実を自分の目で曇りなく見る」ことが大切だと思う。そして感じたこと、学んだことを「発信する」ことが微力ながらも今の自分に出来ることだと思う。

私は広島の原爆について教科書や、資料などで読んで「知識」として捉えているだけだった。しかし広島に行き、自分の耳で聞き、目で見たものは同じ内容でも全く違うものとして心に残った。この先私たちが大人になった時、世界は少しでも平和になっているだろうか。原子爆弾や化学兵器を減らすことは出来るのだろうか。私はこの身体で見聞きした広島のこと、原爆のことを声に出して伝えたい。それが平和に繋がると信じている。

広島から学んだこと

穂高西中学校　３年　荒井　悠ノ介

僕が今回広島平和記念式典に参加しようと思った理由は「戦争を知らない僕ができることは何か」ということを学んで考えたいと思ったからです。８月５日、６日に広島へ行って初めて見た景色はとてもきれいで、被爆した街とは思えませんでした。実際に行ってみて感じたことは二つあります。

一つ目は資料館で見た被爆した水筒や弁当箱は、ただ焼け焦げたものとは違い、形を変え僕が今までに見たことのないものでした。被爆し、その熱線によって着物の柄が皮膚に焼き付いた女性の写真は思わず目を背けてしまいそうになりました。被爆は心と身体に深く刻まれた傷であることが分かりました。

二つ目は原爆のことです。原爆ドームは、きれいな広島の町の中で、その場所だけが当時のままタイムスリップしたようでした。原爆ドームは、元は広島県物産陳列館として大正４年に完成し県内の物産展示や即売、美術展や博覧会などの文化事業の会場としても利用されていた場所だったということを今回初めて知りました。復興する中で原爆ドームを解体してきれいにするという選択肢もあったと思います。そのような中で、一人の女性が「あの痛々しい産業奨励館だけが、いつまでも、恐るべき原爆のことを後世に訴えかけてくれるだろう」と日記に残したことに心を打たれた人々によって原爆ドームの保存への運動が始まったそうです。

僕は今回の学習を通して平和とは何なのか、戦争を知らない僕たちにできることは、どのようなことがあるのかという事を考え、「知ること」と「伝えること」だと思いました。教科書などで原爆投下のことは知っていたけど、本当の現状や被爆の恐ろしさは知りませんでした。「知らなかった」で終わらせてしまうのではなく、「知ったことを伝える」ということが大切だと思いました。広島に原爆が投下されて 78 年が経(た)ち、被爆した人たちの高齢化により実体験を聞くことも難しくなってきました。「知る」そして「伝える」ということを続けていくことで平和のバトンリレーができると思います。

実際に僕が広島で見て感じたことは、核兵器では何も解決しないということです。そして、平和について、当たり前のことではないということを話し合えたり、原爆について知る機会が増えると良いなと思いました。

このようなことを、今回参加した仲間や学校の友達、家族など周りの人と意見を共有して、今後の生活などに活かしていきたいです。

「未来へ」

穂高西中学校　３年　佐藤　ふわり

幸せとは。

平和とは。

本当の幸せと平和を感じることができるのは、過去も知ってこそだと私は思う。

当時の人々は何を思ったのか、平和とは何なのか、そんな思いを胸に、私は 2023 年８月、広島へ向かいました。

実際に被爆地を訪れ、原爆ドームを目にしたとき、改めて原子爆弾の威力の大きさを感じました。勿論、その時点で感じたのは、外見から伝わる被害のみです。

私の中で、最も威力の大きさを感じたのは、生き残った被爆者の方たちが残した思いでした。

被爆者の方の体験を綴った、被爆体験記というものがあります。広島で、ボランティアの方々に被爆体験記の朗読をしていただきました。家族を失い、家を失い、当時の記憶が鮮明に残っている。想像するだけでも辛いことなのに、私たちに記録として体験を残してくれた人たちがいる。そして、その記憶を伝えるために日々努力してくれている人たちがいる。本当に感謝と尊敬を感じました。

私は朗読会を聞き、被爆体験記を残してくださった人たちが本当に伝えたいことは、未来への願いなんだろうと思いました。

二度と原子爆弾が人類に使用されることがないように。

戦争によって苦しむ人がいないように。

誰もが幸せに生きていけるように。

この思いを風化させてはいけない。未来を創っていく私たちに託された課題です。

私には家族がいます。友人がいます。仲間がいます。

この幸せを、広島を訪れてから本当に実感しました。

本当の幸せを感じられるのは、過去を知り、当たり前が当たり前ではないことを実感したとき。

本当の平和が完成するのは、この世界から争いがなくなったとき。完成に近づくためには、私たちが未来へ平和の大切さを伝え続けていかなければいけないと思います。

自分の命ですら奇跡ともいえるこの世界で、私は元気に生きることができています。私が今すぐにできることは、人生の一つ一つに感謝と幸せを感じ、毎日を大切に生きることです。

これから生活していく中で、価値観は常に変化していくと思います。その中で平和や幸せへの考え方も変わるかもしれません。それでも私は、正解のない問いと向き合いながら後悔のない生活をしていきたい。

争いがこの世の中からなくなることを願って。

平和を守るためにすべきこと

三郷中学校　３年　荒深　来実

８月５日、新幹線から降りると体中にまとわりつく蒸し暑さに思わず声がもれました。大きな駅から出ると、78 年前に原子爆弾が落とされた地とは思えないほど、明るくにぎわい、活気があふれていました。

広島平和学習一日目に行った資料館では年齢、性別、国籍問わず多くの人々が長蛇の列を作っていました。世界中の人々が注目するほど、広島の被爆は世界の中でも特に悲惨な事件であると改めて感じました。資料館の２階に上がるとすぐに見えるのは、原爆投下前の広島の街でした。今とは雰囲気こそ違いますが、明るく、多くの建物が並ぶ広島の街はとても美しかったです。昔の街の様子を楽しみながら進むと、暗く重い空気と共に、明るい広島の面影を一切感じさせないほど変わり果てた、原爆投下後の広島の写真が大きく目に映りました。たくさんの建物は地面に無数に広がるがれきとなって積み重なっていました。この写真は原爆の恐ろしさを強く感じさせるもので、私にとって一番の衝撃でした。

「一生けんめいすると、何でも面白いと思った」当時 13 歳で被爆し亡くなった梅北トミ子さんの日記の言葉です。1945 年８月５日の様子を最後にこの日記は終わっていました。トミ子さんやその他の多くの被爆者も８月６日午前８時 15 分まで、いつもと同じように生活をしていました。この日記は人々の生活を原爆が一瞬でうばったことがよく分かるものだと思います。

８月６日、朝早くから平和記念式典へ集まる人は驚くほど多かったです。式典が始まると死没者名簿が慰霊碑に納められました。献花、黙とうが行われ、式典はテレビで見たものと同じように行われました。しかし、実際に参列すると、テレビでは感じられないものを感じることができました。言葉では言い表せない雰囲気に息がつまりました。会場に響き渡る鐘の音は 78 年間の悲しみと、未来への希望のように聞こえました。

今回、広島平和学習を通して、原爆の恐ろしさ、いつもの生活のありがたさを身にしみて感じました。平和とは何か、人それぞれ違う答えになると思います。でも、きっと人々の思う平和には「笑顔」が必ずあると思います。家族、友達、大切な人、世界中の人々。全ての人の笑顔を守るには私たちが平和を守っていくべきだと思います。そのためにも、私は今回の学習のことを多くの人々に伝えていこうと思います。

これからの平和のために

三郷中学校　３年　松村　叶和

「原子爆弾」

その名を持つ兵器がもたらすものは、悲劇しかないと実感させられた二日間でした。

ネットや教科書には載っていないような、刺激の強い資料が並んでいる展示を見たとき、僕は涙が出そうになりました。そこには実際に被爆して亡くなられた方の遺品や被爆者の方の詩、被爆した物などがたくさん置いてありました。特に僕の心に刺さったものは、被爆した人の話を聞いて高校生の人たちが描いた絵画です。がれきから出たくても出られず死んでいく人たち、死んでしまった自分の子どもを抱き抱えるお母さん、失(な)くした自分の左腕を押さえる子ども、そして「まだ生きとる、まだ生きとる」と叫びながら火葬されていく人々。どんな絵画を見ていても自分の心が悲しくなっていく現実がありました。もしも、それが自分の立場であったらどんなに苦しいことであろうか、生き延びた先にあるのは後悔がほとんどであったと思います。今、自分がどれだけ恵まれていて、平和な地の上で過ごすことができているのか、そしてその平和を繋(つな)いでいくのは、僕たちの使命であると感じました。

授業で習っているときには、ポツダム宣言をすぐに受諾していれば、原爆が落とされず、ここまで悲惨な結果にはならなかっただろうと思っていました。しかし、戦時中の日本では食料不足になり、日用品も配給制、戦争反対などと発言すると一家全員が非国民だと言われてしまう始末。このような状況も平和には程遠いと思いました。

今現在も、ロシアとウクライナの戦争や、たくさんの国で起こっている紛争や内戦、それらの結末が広島や長崎のようにならないように願っています。

核をこの世界から無くすことは、とても難しいことだと思います。ただ、唯一の被爆国として、唯一の被爆国だからこそ知っている原爆の悲惨さと平和のありがたみ、これを世界へ発信し未来の平和を守っていくことはできるはずです。

食べたいものが食べられ、学校で授業が行える、ありふれた平和がなくなってしまわないために、できることを考え続けていきたいです。

平和式典に参加して感じたこと

堀金中学校　３年　百瀬　唯希

私は、８月５日、６日に行われた広島平和記念式典に参加しました。そこで、原爆が多くの人の命をうばったのみならず、生き残った人々を今も傷つけ続けていることが分かりました。

５日に行われた被爆体験記朗読会では、特に、坂本はつみさんが書いた、「げんしばくだん」という詩が心に残りました。「げんしばくだんがおちると　ひるがよるになって
人はおばけになる」この詩を聴いた時にとても心をしめつけられました。坂本さんにも日常があり、家族といて、楽しく笑っていた時間があったけれど、一発の原爆によって一瞬にして消し去られてしまった切なさを感じます。

また、「人はおばけになる」から、熱風により人の皮膚が垂れ下がってしまい、腕を体に付けられずに、前に出している様子がおばけのように見えたことが伝わってきました。

一番心に残ったことは、６日に行われた平和記念式典での、広島県知事の言葉です。全世界の核抑止論を支持する人に向けて、「あなたは今この瞬間にも命を落としている人たちに対し責任を負えるのですか」とおっしゃっていました。私は、この言葉を聴いて心を打たれ、共感しました。一発の原爆によって多くの犠牲者が出て、遺族の方々や広島の皆さんが原爆の恐ろしさを訴え続けているにも関わらず、核抑止の考えで同じ過ちを繰り返そうとしていたり、核廃絶を遅らせていることは、あってはならないと思います。この人たちは広島で起きたことが自分の身の周りで起きても、まだこの考えを貫き通せるのでしょうか。この人たちは核の恐ろしさを分かっているのでしょうか。

私は、この広島で起きたことを、自分の周りの人たちに伝え続けていくことが重要だと思いました。そのためには、しっかりと広島で起きたことを受け止め、学んでいくことが大切だと思いました。今、戦争を体験した人たちが高齢化していく中で、私たちがそれを受け継いで伝えていかなければ、記憶などは風化してしまい、また同じ過ちが繰り返されてしまいます。

そのため、一人でも多くの人たちに自分が学んだことを伝えて、核廃絶や世界の平和に少しでも協力していきたいです。

未来永劫変えないために

堀金中学校　３年　丸山　幸

私は、今回このような事業に参加させていただいたことをとてもありがたく思っています。私は小学生の頃に『はだしのゲン』という漫画を読んで、何度も読み返す程興味を持ち、実際に『はだしのゲン』に出てくる被爆地をこの目で見てみたいと思っていたからです。

８月５日に訪れた資料館では、『はだしのゲン』と似た原爆の絵が展示されていました。作者である中沢啓治さんは、６歳の頃に広島で被爆しており、34 歳から漫画の連載を始めました。中沢さんの連載開始時の年齢から分かるとおり、被爆者の方には、非被爆者の私たちには想像もできない程強く原爆の記憶が焼きついているのだと思いました。

資料館で展示されていた絵画からも読み取れることはたくさんありましたが、被爆して亡くなってしまった方々の遺品の展示からも様々なことが感じられました。例えば服の大きさです。今の中学生の平均身長は女子なら 156 ㎝、男子なら 165 ㎝程です。ですが、展示されている服は全て小学校低学年が着ているような大きさの服ばかりでした。この事から分かるのは、戦時中の日本には食料が少なく、発育に必要な栄養がしっかりと取れるような状態ではなかったという事です。

資料館の展示以外でも感じたことがありました。海外の方々が音声解説を聴きながらじっくりと目に焼き付けるように見る様子を見て、時代が変化してきているとしみじみ思いました。

８月６日の朝、私たちは平和記念式典に参加する為に平和記念公園を訪れました。平和記念式典には各国の代表たちが集まり、午前８時 15 分に１分間の黙とうが捧げられました。黙とうを捧げている最中には平和の鐘が響き渡り、そこにいた人々と、画面越しの人々の心を一つにしたことでしょう。

私は戦争の反対が平和であるとは思いません。戦争が無ければ平和になるのか、戦争が無くてもスラム街の人々は安全ではありません。私には平和の反対も戦争の反対も分かりません。ですが、平和と幸せは併存できても戦争と幸せは併存できないと思います。ある人の言葉に「みんな幸せになりたいのは一緒、ただその過程が違うだけ」という言葉があります。一生不幸で居続けようと思う人はいないかもしれませんが一生幸せが続けばよいと思う人は、数千万人、数億人といます。その幸せになる過程で、自分の幸せや、自国の幸せの為に、人の死による犠牲を払ってはいけません。あなたの大切な人がいるように他の誰かにも大切な人がいるのです。何かに犠牲を払わなくてはいけなくなった時は、一度胸に手を当てて考えてみてください。そうすればきっと、その犠牲が必要なのか分かるはずです。

最後に、広島が世界で初めての原爆投下地であることは未来永劫変わりません。ですが長崎が世界最後の原爆投下地であることは、未来永劫には約束されていません。もし誰かが学ぶことなく同じ過ちを繰り返そうとしてしまうなら、その人が過ちを繰り返さない為にサポート等をしていくことが、戦争のない平和へ近付く為の鍵になると私は考えます。

繋(つな)いでいくもの

明科中学校　３年　三河　唯人

原爆の恐ろしさを、身をもって感じました。僕たちは安曇野市を代表して、８月５日、６日に広島に行きました。広島に着いて最初に行ったのは原爆ドームです。やはり写真で見たときとは、迫力が明らかに違いました。間近で見ると原爆ドーム内には昔と変わらず瓦礫(がれき)がありました。それを見ただけでも原爆の威力というものが伝わってきました。原爆ドームの周りは緑で美しく、とてもきれいだと思いました。しかし、その緑も数千度という熱風で焼かれたと考えると、とても恐ろしかったです。

次に広島平和記念資料館に行きました。そこには当時破壊されてしまった建造物や、燃えた服、割れたガラス片が爆風により突き刺さった壁などがありました。何もかも破壊された広島の町や、後遺症に苦しむ方々の写真などが展示されており、そこで放射線の見えない怖さについて知ることができました。

二日目の朝、ホテルを６時に出発して、広島平和記念式典の会場となる平和記念公園に向かいました。６時 40 分頃に着きましたが、たくさんの人がいて驚きました。

そして８時になり式典が始まりました。最初の 10 分ほどは、広島市長や広島県知事、岸田内閣総理大臣などの方々が慰霊碑に献花を行いました。そして８時 15 分、あの 78 年前と同じ晴れた空のもと、鐘が鳴り、僕たちは黙とうを捧げました。人類に初めて投下された原爆により広島にいた 35 万人のうち、14 万人の方々が命を落としてしまいました。黙とうを捧げている間、亡くなってしまった方々に心から祈りを捧げました。式典中、岸田総理はじめ来賓のあいさつがありました。その時、広島県知事の話した言葉が頭から離れません。その言葉は「核抑止が破綻した場合、全人類の命、地球上の全ての生命に対し、責任を負えるのですか。世界で核戦争が起こったら、こんなことが起こるとは思わなかったと肩をすくめるだけなのでしょうか」と、とても力強い声で話していました。

続いて「ひろしま子ども平和の集い」に参加しました。そこで、被爆体験者の方による講話がありました。そこで聞いたお話は自分が想像していた以上に恐ろしいものでした。

お話をしてくれた梶本淑子さんによると、当時、太平洋戦争の影響で食料不足になり、栄養不足などで多くの方が亡くなったそうです。そして、８月６日午前８時 15 分、窓越しから青白い光とともに身体が浮くほどの威力だったと語っていました。気がつくと木材などの下敷きになっており、身体が全く動かなかったそうですが、何とか抜け出して、学校で教わったように「火事になるぞー！」と叫んだそうです。その後の広島の風景の話はとても恐ろしく思いました。お昼頃からの火事、道を歩く人たちはおばけのような姿で、水が飲みたい人に水を飲ませると亡くなってしまうという話は、聞くのがつらく、涙が出そうになりました。

その後、放射線の影響で後遺症が出始め、梶本さんもがんになったそうです。がん以外にも白血病にもなり、78 年経(た)った今も影響は続いていると言っていました。そして最後の言葉は、「命を大切にしてください」、この気持ちは被爆を体験した人が一番分かると思います。被爆で命を落とす瀬戸際にいた人の言葉であり、僕はお話を聞いて、命を大切にしたいと思いました。梶本さんは僕たちにもう一つ伝えました。「平和な世の中にしてほしい」と。

今回広島で見たもの、聞いたものは、今後の世代に繋(つな)いでいくことが大切だと思いました。僕は、梶本さんが体験したことをいろいろな人に伝えられたらなと思いました。

伝え続けることの大切さ

明科中学校　３年　鳥羽　可苗

私が広島平和記念式典で感じたことは「核兵器の恐ろしさ」と「戦争の悲惨さ」です。なぜなら、私は、被爆体験者の方が語った命の尊さの思いに触れたからです。教科書には「1945 年８月６日に広島に原子爆弾が落とされ、約 14 万人の命が失われた」程度にしか書かれていなかったです。しかし、現実はもっと悲惨でした。私たちに語ってくれたお話は、現代の普段の生活では考えることのできない苦痛や恐怖に満ちていました。原爆が落とされ、家屋の下敷きになったとき、痛みで生きていることを実感できたそうです。

原爆を落とされたときの絵も見ました。腕をなくして泣き叫んでいる少年の絵がありました。こんなことが起きていいものなのでしょうか？私はこの絵を直視することができませんでした。私の想像を超えるほど凄惨で、被爆した人にとって二度と思い出したくないものだったと思います。それでも８月６日に起きたことを私たちに伝えてくれたのは、平和や一人一人の命を大切にしてほしいという思いがあったからだと思います。

また、広島平和記念式典では広島県知事によるあいさつもありました。そこでは、ロシアによるウクライナ侵攻に触れ、「ウクライナが核兵器を放棄したから侵略を受けているのではありません。ロシアが核兵器を持っているから侵略を止められないのです」という言葉が印象に残っています。

日本では戦後、その悲惨さや平和の尊さを伝える人たちなどの活躍もあって、平和が続いています。ですが世界を見ると、ロシアとウクライナをはじめ、まだ戦争が起こっています。さらに、ロシアは戦争を起こすだけでなく、核兵器の使用もちらつかせているのです。私は、これは絶対に許してはならないことだと思います。広島での惨状を見たり聞いたりして、もう、悲しく辛いだけの核兵器の使用をさせてはならないと感じました。そして、そもそも、戦争を起こしてはならないと思いました。

今回、この事業に参加して、このような戦争による悲しい体験をした人がいるからこそ、戦争、ましてや原子爆弾の使用は良くないと思いました。私は政治や世界を動かせるほどの大きな力を持っていませんが、この二日間で学んだことを周りに伝え、平和を守っていくことはできます。まずは、中学校の文化祭の発表の機会でそれを実行していきたいです。

～松本大学　平和創造研究会の皆様より～

私が平和記念式典参加事業に参加して驚いたことは中学生たちの学ぶ姿勢である。生徒たちは資料館での短い見学の時間の中で、資料を見逃してしまうことなくいつでも見返せるようにと、できる限り写真に収めていた。また、資料館には焼けたお弁当箱や燃えた衣服のような物品の展示もあれば、原爆により負傷した人々の写真のような目を覆いたくなるような記録の展示もあった。そういった展示に関しても、目を背けることなく向き合っていた。展示品の中には当時小・中学生だった人の写真も展示されており、それらを見ることで原爆の被害を我が事のように感じ、原爆による被害の大きさや、戦争そのものの凄惨さを真摯な姿勢で捉えていた。戦争によって兵士ではない、一般の人々が年齢関係なく負傷し、さらに亡くなった方だけでなく、残された遺族の方も心に大きな傷を負った事実と向き合い、今後も戦争をしてはいけないとそれぞれの視点から考えている様子から、今後も戦争や平和について考える機会を大切にしてほしいと思った。　　（神戸　美乃里）

８月５日、６日の二日間、安曇野市内の中学生の皆さんとともに、広島県にて開催された平和記念式典への参加及び平和記念公園の見学を通して、広島という町の歴史と戦争の現実について学んできました。私自身は、３回目の広島訪問となり、今回は、中学生の皆さんがどんな視点で平和を考えるのか、原爆の悲惨な現実を知りどんなことを思うのか、という視点を持って参加しました。

初日、原爆ドームから平和記念資料館を見学し、事前の学習会で設定したテーマを参考に、平和について学びを深めました。記念公園内には、子どもをテーマにした建造物も多くあり、中学生の皆さんも、自分たちと近い世代の人たちが無差別に殺されていった戦争の恐ろしさ、悲惨さを感じたのではないかと思います。

二日目の式典への参加も、貴重な経験として、胸に残ったと思います。今回の事業で学んだこと、感じたことを、今後の人生において大切に残していってもらいたいと思います。

（藤田　達也）

今回の広島平和記念式典参加事業で、安曇野市内の中学生の皆さんと一緒に、平和について考え、広島平和記念式典に参加できたことはとても嬉しく、自分自身の学びにも繋（つな）げることができました。

学習会を通して「アメリカ側から見た原爆投下」という着眼点から資料館を見学しました。なぜ原爆投下の場所を広島にしたのか、開発事情や、アメリカ側の視点から原爆投下に至った経緯を深く学ぶことができました。

また、被爆体験講話での梶本さんのお話が印象に残りました。その内容は、私の想像をはるかに超え、日常から切り離され、生々しく耳をふさぎたくなる内容もありました。しかし、話された内容は本当に起こった事実であり、私たちは受け止めなければなりません。最後に梶本さんは、「いのちを大切にしてほしい」と話されていました。残念なことに世界では、今もなお戦争が続いています。今、私にできることは今回の学習で学んだ事、感じた事を発信する事です。戦争の悲惨さ、平和の尊さを多くの人に共有していきたいと思います。　　（長谷川　早紀）

―おわりに-

令和５年度　広島平和記念式典参加事業を振り返って

令和５年８月５日・６日、安曇野市内７校の中学校の代表の皆さん 14 名と一緒に、広島平和記念式典に参加することができました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のための行動制限はなくなりましたが、安曇野市総務課の皆さんには、生徒たちの健康や安全への配慮などに大変ご尽力をいただき、おかげさまで、全員無事に参加することができましたことに、まずもって感謝いたします。

安曇野市は、平成 24 年に安曇野市平和都市宣言を制定しました。これに係る活動の一つとして、市の将来を担う若い世代の方々に、過去に起きた戦争の悲惨さを実際に見る機会を通じ、平和について学び、考え、行動するなどの平和意識の高揚を図ることを目的として、この事業が行われています。また、今年度から平和学習の更なる充実を目的とし、松本大学と連携して実施されました。事前と事後に学習会が行われ、当日も松本大学の学生３名に同行していただき、生徒の学習がより深まるよう、アドバイス等をいただくことができました。

８月５日（土）は、広島平和記念資料館、世界遺産の厳島神社を見学しました。夕食後には、被爆体験記朗読ボランティアの方々にお越しいただき、朗読会に参加しました。

翌６日（日）は、「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」に参加しました。今年の式典参加者は、新型コロナウイルスの感染が拡大する前と同じ規模のおよそ５万人で、過去最多となる 111 か国と欧州連合（ＥＵ）の駐日大使らも出席しました。式典の中で述べられた広島市長による「平和宣言」や広島市の小学校６年生による「平和への誓い」にはとても心を打たれました。

また、式典が終わった後に参加した「ひろしま子ども平和の集い」では、92 歳の梶本淑子さんから、14 歳の時に被爆した体験談を聞かせていただき、戦争の恐ろしさや怒り、平和への願いを新たにしました。

この二日間を通して、参加したみなさんの積極的に学ぶ姿勢や行動の素晴らしさがとても印象的でした。とても学びの多い充実した二日間だったことと思います。この体験を通して、学んだことや感じたことを、家族や友達などの周りの方々にも伝えてほしいと思いますし、これからの人生に生かしてほしいと思います。

最後になりましたが、この事業の計画・準備・運営まで、細部に渡ってご尽力いただきました安曇野市総務課の皆様、生徒の指導にあたってくださった教育委員会の矢野様、生徒の健康に気遣ってくださった保健師の矢嶋様、生徒の学びに寄り添い、指導助言をいただいた松本大学の平和創造研究会の３名の学生の皆様に感謝を申し上げ、まとめとさせていただきます。

安曇野市校長会　豊科北中学校長　臼井　宏之

～広島平和記念式典参加事業のあゆみ～

安曇野市では、平成 24 年度から広島平和記念式典参加事業を実施しており、これまでに延べ 213 人の中学生が参加しました。

平成 24（2012）年　第１回　中学生　20 人が参加
平成 25（2013）年　第２回　中学生　20 人が参加
平成 26（2014）年　第３回　中学生　20 人が参加
平成 27（2015）年　第４回　中学生　21 人が参加
平成 28（2016）年　第５回　中学生　21 人が参加
平成 29（2017）年　第６回　中学生　28 人が参加
平成 30（2018）年　第７回　中学生　28 人が参加
令和元（2019）年　第８回　中学生　28 人が参加
令和２（2020）年　コロナ禍により事業中止
令和３（2021）年　コロナ禍により事業中止
令和４（2022）年　第９回　中学生　13 人が参加
令和５（2023）年　第 10 回　中学生　14 人が参加

令和５年度　参加者　名簿

参加生徒	豊科南中学校	中越　滉貴 中野　和菜	豊科北中学校	伊藤　大雅 小林　瑞季
	穂高東中学校	塚山　聖 徳竹　芽依	穂高西中学校	荒井　悠ノ介 佐藤　ふわり
	三郷中学校	荒深　来実 松村　叶和	堀金中学校	百瀬　唯希 丸山　幸
	明科中学校	三河　唯人 鳥羽　可苗		

松本大学　平和創造研究会	神戸　美乃里 藤田　達也 長谷川　早紀

随行職員	豊科北中学校	臼井　宏之	看護師	矢嶋　美和
	教育委員会	矢野　司	総務部総務課	花岡　慧

～事業の記録～

10 回目の事業実施となる本年度は、平和学習としての事業内容の一層の充実や、若い世代への波及効果を高めるため、松本大学と連携して本事業を実施しました。

参加した中学生は、事前に学習テーマを設定し、広島平和記念式典に参加しました。その後の学習会では、大学生のサポートのもと、学習テーマに沿って広島での学びや気づきを共有し、９月２日(土)に行われた平和学習成果発表会において、グループごとに２か月間の成果をスライドにまとめ発表しました。

令和５年７月８日（土）　【第１回学習会】

令和５年８月５日（土）　【平和記念公園】

【広島平和記念資料館】

【被爆体験記朗読会】

令和５年８月６日（日）

【平和記念式典】

【ひろしま子ども平和の集い】

令和５年８月 19 日（土）　　【第２回学習会】

令和５年９月２日（土）　　【第３回学習会・平和学習成果発表会】

安曇野市平和都市宣言

雄大な北アルプスの麓　清らかな水
緑かがやく　自然豊かな安曇野を
私たちは守っていきます

健康で幸せな生活のために
みんなで支え合い　差別のない社会を
私たちは築いていきます

みんなの笑顔が　子どもたちの明るい未来が
いきいきとした命の営みが続くことを
私たちは求めていきます

平和を願う人々と手を取り合って
全ての不安や争いをなくすために
私たちは行動します

私たちは　美しい故郷　安曇野から
平和な社会の実現に向け
ここに「平和都市」を宣言します